|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 科目名 | 年度 | レポート番号 | クラス | 学籍番号 | 名前 |
| API実習 | 2021 | 3 | B | 20120005 | 伊賀爽太 |

レポートは極力5ページ以内とします。ページ数や文字数よりも、わかりやすく書けているかどうかが、点数アップの分かれ目です。

API連携について、実用的なAPIとその活用について調査すること。

評価ポイント

選択したAPIの連携にどのような事例があり

具体的な実装方法について調べ

自分が使うのであれば、どんな使い方が考えられるか << 天気予報に使えると思うなどはNG。具体的に考えよう。

API連携の事例

選択したAPIは「Microsoft Face API」。このFace APIは、MicrosoftがCognitive Services\*1の一つとして提供しているAPIである。このAPIでは画像に含まれる顔を検出して、四角形の座標を表示する「顔検出」、二つの顔を分析して同一人物であるのか評価する「顔検証」、ターゲットに似た顔の検索が可能な「類似した顔の検索」、類似性から複数の顔画像をグループに分類する「グループ化」、データベースから求められる顔画像を識別する「人物の特定」など、顔を検出・分析する機能が実現可能。

ソフトバンクではPepperとバリスタをAzure(microsoftのクラウドコンピューティングサービス)で連携させて、ロボカフェというサービスを提供している。Pepperが顔を覚えて、人物と注文したコーヒーを紐づける。そして、それ以降にまた訪れた時に、顔を認識して決まったコーヒーを提供してくれる。PepperからWiFiでAzureに客の情報が送られ、アプリとコーヒーメーカーがBluetoothで連携します。

顧客の情報を記録して、何かと紐づけることが可能ならば、ファッション関係に大きく関与できるのではないかと考えました。類似した顔の検索やグループ化が可能ということは、そのグループに属している人達がよく購入する商品などを記録することによって、おすすめの商品が購入者にとってより相応しいものにできる筈です。

アプリでそれを可能にすることによって、接客がストレスな購入者も、迷うこともお薦めされて話しかけられることもなくなるので、大きなメリットになるでしょう。

\*1 人間の認知(Cognitive)を模した機能を、WebAPIすぐ利用できる「AIパーツ」。AIやデータサイエンスの技術知識を使わずに、視覚、音声、言語、決定、検索といった認知ソリューションを構築できる。

<https://esg.teldevice.co.jp/iot/azure/column/column17.html>